

『中国言語文化研究』第12号

杜甫「春望」の「感時花濺淚、恨別鳥驚心」句の解釋

宋代の場合

岡本洋之介

1

杜甫が長安にて「春望」を詠んだのは、安祿山舉兵から一年數ヶ月後、至徳二載（七五七）春である。この年、四十六歳。安祿山は安慶緒に殺されたものの、長安はまだ叛亂軍側の支配下にある。杜甫は前年に家族を鄜州へ避難させており、いまだ別離状態が続いている。しかも自身は一度目の長安脱出に失敗、叛亂軍側に捕らわれ長安へ引き戻された身である。杜甫はそういう状況でこの詩を詠んだ。『杜詩詳注』卷四。

春望

國破山河在	國破れて山河在り
城春草木深	城春にして草木深し
感時花濺淚	感時花濺淚
恨別鳥驚心	恨別鳥驚心

烽火連三月 烽火 三月に連なり

家書抵萬金 家書 萬金に抵る

白頭搔更短 白頭 搔けば更に短く

渾欲不勝簪 渾べて簪に勝えざらんとす

三、四句目「感時花濺淚、恨別鳥驚心」については解釋が分かれる。杜甫を主體とし

「時に感じては花にも涙を濺ぎ、別れを恨みては鳥にも心を驚かす」と讀む説、花鳥を主體とし「時に感じて花は涙を濺ぎ、別れを恨みて鳥は心を驚かす」と讀む説に、分かれる。

杜甫主體説は、梅堯臣や司馬光がそのように解釋する方向で注釋をつけた、言わば傳統的に讀み繼がれてきた説である。花鳥主體説は、例えば野口宗親氏が「周知のように故吉川幸次郎博士が從來もあつた讀みを踏まえて、改めて提唱されたものである」と紹介するように⁽¹⁾、『新唐詩選』、『杜甫』、『杜甫詩注』第三冊、『吉川幸次郎全集』第十一卷に見える吉川見解以後、議論の對象となることが増加したと言えよう⁽²⁾。

本論は、兩説の是非を決しようとするものではない。宋人が「春望」の三、四句目をどのように解釋していたか、その確認を目的としたものである。あらゆる面において、宋人の方が我々よりも杜甫に近い。その分、杜甫の意圖を適切に汲み取っている可能性も高からう。

梅堯臣や司馬光が杜甫主體で理解したように、宋人はみな杜甫主體で讀んでいたのだろうか。兩句を花鳥主體として讀むことはあり得なかつたのであろうか。さらに言えば、花鳥を主體で讀むのであれば今で言う擬人法での表現とみなしていたこととなり、宋詩に

見える擬人法の例についても觸れる必要性が生じる。以下、それらの點を検討していく。

2

宋人が「春望」の三、四句目をどのように読んでいたか。まず、梅堯臣と司馬光の注釋を見ておこう。

梅堯臣は「感時花濺淚、恨別鳥驚心」について、

花鳥、常時可娛之物、今覩之、濺淚心驚。其憂可知。

と言う。『分門集註杜工部詩』卷二。「花鳥は平時に樂しむべき物である」とは、花や鳥に對する人間としての一般的態度を述べている。そして「之を覩て」、つまり花や鳥を見て、涙を流し心が波立った、と續ける。誰が見て誰が泣いたのか。その主體は明らかに杜甫である。梅堯臣はそう讀んでいる。

司馬光が『續詩話』で「春望」を評した文章は、もう少し具體的である。仇兆鰲の『杜詩詳注』はそのくだりを引く。卷四。司馬光は、古人は作詩に際して讀み手に言外の意を得させることを貴んだ、と述べた後、その例として「春望」を舉げる。

古人爲詩、貴於意在言外、使人思而得之。故言之者無罪、聞之者足以戒。近世唯杜子美最得詩人之體。如春望詩國破山河在、明無餘物矣、城春草木深、明無人跡矣。花鳥、平時可娛之物、見之而泣、聞之而悲、則時可知矣。

花鳥を取り上げたくだりのみにしぼって見てみよう。「平時に樂しむべきものである、それなのに、花を見て泣き、鳥の聲を聞いて悲しむ、そこから作詩時の狀況が知られる」

と言う。主張内容は梅堯臣と同じである。杜甫は花を見て泣き、鳥の鳴き聲を聞いて悲しんだ。司馬光は、泣き悲しむ主體は杜甫と見ている。

梅堯臣と司馬光のこの見解は、杜甫主體説の代表と言える。例えば後代の注釋書は、梅堯臣や司馬光の説を紹介する一方、他の見解に言及することはない。むしろ、それゆえにこの見解が當時の主流であつた、とみなすのは單純かつ危険である。そこで、「春望」の三、四句目を踏まえつつしかも杜甫主體で讀んだことが明らかな例を、宋詩の中から提示しておく。

まず、陳舜俞の「南陽春日十首」之五（八、四九六四）⁽³⁾。

念遠片心飛鳥外 遠きを念わば 片心 飛鳥の外

感時雙淚落花前 時に感ぜば 雙淚 落花の前

下の句は、句の構造や言葉の重なり具合からするに、「春望」の三句目「感時花濺淚」を襲つたことは明らかである。そして「時勢に感じると散つた花の前でふたすじの涙がこぼれる」主體は、詠み手の陳舜俞と解釋する以外にない。陳舜俞は「春望」の三句目を杜甫主體で讀み、その上で下敷きとしたのである。

あるいは、張耒の「榮子邕の石家寺閣に登るに同ず」（二十、一三二〇四）。

驚心鳥語知時好 心を驚かす鳥語 時の好きを知り

照眼花枝著意新 眼を照らす花枝 著意新た

「私の心を驚かせる鳥のさえずりにより好き時節であることが知れ、眼に入る花枝のおかげで詩の着想を新たにする」。上の句は「春望」の四句目を典故としている。この句の主體は明らかに詠み手であり、「心」も詠み手の心とみなさねば意味が取れない。張耒は

「春望」の四句目を「鳥のさえずりが私の心を驚かす」と解釋し用いたと言えよう。なお、下の句は花が出てくるけれども杜甫の別の詩を典故としたもので（薬裏關心詩總廢、花枝照眼句還成。「酬郭十五受判官」）「春望」の三句目とは關係ない。

右記に挙げた例の他、杜甫主體で讀んでいたことがうかがえる例は幾つもある⁽⁴⁾。「春望」の三、四句目で「涙を流す」「心を驚かす」のは杜甫、という讀み方は宋人の中に確實にあったと言える。

宋詩をひもとけば杜甫を主體と見て讀んだ例を見て取れる。では、花鳥を主體として讀む例についてはどうかであろうか。宋詩の例を確認する前に、先に觸れた吉川見解において、南宋時點での例として指摘されている羅大經のとらえ方を少し詳しく見ておこう。羅大經は『鶴林玉露』卷十において、「詩莫尚乎興詩」「詩は興より尚きは莫し」と言

い、
蓋興者、因物感觸、言在於此、而意寄於彼、義味乃可識。非若賦比之直言其事也。故興多兼比賦、比賦不兼興。古詩皆然。

「興とは、物によって心を動かされて、言葉は目に見えるところにありつつ、心情は目に見えないところに寄せてあるもので、詩のそういう味わいをば知るべきである。賦や比のように言おうとする事柄をじかに言うのではない。だから、興は比や賦を兼ねることが多いけども、比や賦は興を兼ねない。かつての詩はみなそうであった」と、詩における「興」、つまり自然物を歌うことで人間の心情を表す歌い方こそ価値高いものと述べる。そして、例として杜甫の詩を四首取り上げて評している。その中に「春望」も入っており、

「發潭州」と比較する形で見える。

發潭州云、岸花飛送客、檣燕語留人。蓋因飛花語燕、傷人情之薄、言送客留人、止有燕與花耳。此賦也、亦興也。若感時花濺淚、恨別鳥驚心、則賦而非興矣。

「發潭州」の「岸花 飛びて客を送り、檣燕 語りて人を留む」は、賦でもあり興でもある、という。なんとなれば、飛ぶ花が人を見送り燕が人に語りかける、と擬人法で眼前の光景をありのまま描寫することが、實は見送る人もなく引き留めてくれるのは花と燕のみ、という寂しさをも同時に表すからである。

では、「賦にして興に非ず」とする「春望」の「感時花濺淚、恨別鳥驚心」を、羅大經はどう解釋していたのか。「發潭州」と同じく賦、すなわち直接の敘述であるとする點から、「感時」するのは「花」と見ていた、と考えてよい。「濺淚」するのも、その語句の構造から言ってももちろん「花」以外にはあり得ない。「感時」部分の主體のみ詠み手の杜甫とするなら、「杜甫が時勢に感じ花が涙を流す」と分かれてしまい、上下のつながりがわかりづらくなる。つまり羅大經は、杜甫はその目に「花が時に感じ花が涙を流す」と映った光景を丸ごと敘述した、四句目も同じく「鳥が別れを恨み鳥が心を驚かせた」ありさまを詠んだ、と解釋した。そう解釋したけれども、それは「發潭州」の詩句が寂しさを表したのとは異なり人間の心情をも表すようには受け取れないので「興に非ざるなり」と評した。羅大經が杜甫の意圖を正確に汲んでいるかどうかは別として、花鳥を主體として讀んでいることは確かである。

この、花鳥を主體と見て「春望」の三、四句目を讀む解釋は、花鳥を人に見立てた擬人法の表現と直結する。これは、梅堯臣や司馬光の注釋および「春望」の三、四句目を杜甫

主體で解釋してその句を襲った宋詩の例とは、相反する。よって、問題は、「花」「鳥」に限定してもなお擬人法で表現する例が宋詩に見えるか否か、という點に絞られる。見えるのであれば、宋人が羅大經のように「春望」の三、四句目を解釋する素地を有していたことが證明されよう。

ではあらためて、花鳥を主體として詩中に用い、なおかつそのどちらもが擬人法で表現される例を確認していく。

歐陽脩に「啼鳥」と題した古詩が二首ある（六・三六〇三）。どちらも花鳥を中心とし詩全般にわたって擬人的である。ここでは「窮山侯至陽氣生」で始まる方を取り上げる。歐陽脩は「花開き鳥語り輒ち自ら酔い、酔いて花鳥と交友と爲る」とうたい、花鳥を自分の友と見立て、以下のように續ける。

花能嫣然顧我笑 花は能く嫣然として我を顧みて笑い

鳥勸我飲非無情 鳥は我に飲を勸めて情無きに非ず

「花はあでやかに私に笑いかけ、鳥は情厚く飲めとすすめてくれる」。自然界の何物かを人間になぞらえそれが詩の詠み手に對して何かをしてくれる、という擬人法である。しかも歐陽脩は、花鳥を自分と同じ人間に擬すという設定をわざわざ述べた上で、そう表現している。

秦觀の例も見てみよう。「春日雜興十首」の七首目（十八・一二〇七二）。

山鳥窺茗飲 山鳥 茗飲を窺い

簷花笑蔬餐 簷花 蔬餐を笑う

「山鳥は私が茶を飲むことを窺い、軒そばの花は私の粗末な食事を笑う」。花鳥が人間

の行爲に關心を持っているかのように描いた擬人法である。ここでの「笑」には、本來の花咲くという意味はない。食事の粗末さを強調するため、花にも笑われるほど、と表現しているのである。

姜夔の「陳君玉 小集を以て歸せられ、余の誠齋に朝天續集を還すの韻を用い七字を作す。夔 報い贖う」のような擬人法もある（五十一・三二〇四六）。

水邊白鳥閑於我 水邊 白鳥 我より閑かに
窗外梅花疑是君 窗外 梅花 疑うらくは是れ君かと

「水際の白鳥は世俗と關與せず私よりひそやかで、窗の外の梅の花はあなたかもしれない」。この詩では、姜夔は詩を贈る相手を梅の花になぞらえている。上の句も、鳥は靜謐にしているという状態の描寫に見えるけれども、「白鳥は私よりも」と比較対象を人間としている點から、廣義での擬人法と解釋して支障ない。

以上に挙げたような例は他にも見出せる⁽⁵⁾。そういう詩が、ある時期やある詩派に集中するわけではない。また、花鳥が詠み手に對してより積極的に關わる言わば使役的な擬人法も、詠み手から見た花鳥の状態を人になぞらえて表現する擬人法も、どちらの表現も見える。それらをあわせ考えると、花鳥を主體とした擬人法の表現は、宋人にとってありふれたものであり、當然讀む際にもそれと見分けることができた、そういう技巧であつたと考えてよい。となると、羅大經が「春望」の三、四句目について「賦」つまり直敘、花や鳥の姿をありのままうたったと判斷したのは特殊な見方ではない、ということになる。その解釋が出てくる素地は宋人に共通してあつたもの、と言えるからである。

前段の前半では、「春望」の三、四句目を杜甫主體で讀む例の存在を確認した。後半では、羅大經が花鳥主體で解釋する例を取り上げ、宋人がそう讀むことは充分あり得ることも確認した。そこを踏まえた上で、もう少し考察を加える。

まず、「春望」の三、四句目を典故として用いなおかつ擬人法で解釋していたことがうかがえる例は宋詩に見えるか否か。この點を確かめるのは、簡単ではない。その條件を十全に満たす例が宋詩には見当たらないからである。よって、「春望」の一部を句作りに用いた例を挙げておく。周紫芝の「山中に盜を避けて後十首」の二首目である（二十六、一七一五九）。

豈無花到眼 豈に花の眼に到る無からん

可奈鳥驚心 鳥の心を驚かすを奈すべき

「どうにもこうにも花が目に入ってしまうし、鳥が私の心を驚かすのをどうしたらよいか」。上の句で「花が自分の視界に入る」と言う點を考えると、下の句は鳥を主體とした擬人法で、鳥が周紫芝の心を驚かすと讀むのが自然である。盜賊から避難している身にとつては、たとえ鳥がそう意圖していなくとも、その舉動ひとつに驚かされることをうたっているのである。この詩は山の中へ避難しているという自身の日常生活を失った状況下で詠んだものであり、その點では「春望」を詠んだ時點の杜甫の状況と共通する。「春望」の四句目「鳥驚心」をそのまま襲うあたり、周紫芝が「春望」を意識していたのは明らかで、「春望」の「心」も「杜甫の心」と見ていた可能性は高い。羅大經と同じく鳥主體で

開」するのは花であり、「花泣露」の「花」はもちろん主體、「泣」するのも花、「露」も花の露、と一貫して花を主體と詠んだ。この差は、「感時」「欲開」の語は何を主體としやすいか、という語としての性質から生じたものである。梅堯臣の語に對する感覚では、「感時」の主體には杜甫が、「欲開」の主體には花が、それぞれふさわしいものであった。「花」が「感時」するとはみなしにくく、そのため、同じ構造の句であっても主體の取り方が異なるのである。人と物とどちらを主體と判斷するかは、詠み手と讀み手それぞれが詩句の語の性質をどうとらえているかに依據する、ということである。

梅堯臣の例では検討し得ない「恨別鳥驚心」の「恨別」「驚心」兩語の場合は、鳥が主體であるときとみなしやすい。花の場合よりも一層みなしやすい。鳥とはどういうものか、各人の認識が合致しやすいからである。『戰國策』の楚策に、

其飛徐而鳴悲。飛徐者故瘡痛也、鳴悲者久失羣也。故瘡未息而驚心未去也。

とある。楚の春申君に對して趙の魏加が將軍任命について意見したくだり、その中の例えで、射られ傷ついた鳥とはこういうものだ、と述べた言葉である。鳥の飛ぶ速さがゆっくりなのは古傷が痛むから、鳴き聲が悲しいのは長く群れからはぐれているから。古傷は癒えておらず、心を動揺させることが消えない。この故事では傷ついた鳥と限定するけれども、「鳥」が「久しく羣れを失す」「一羽きりになると」「鳴悲」鳴き聲も悲しい、しかも「驚心未だ去らず」動揺状態となる、と述べていることが重要である。鳥とはそういうものの、その状態を示す言葉はこれ、と詩人一般が共通の觀念を持ち得るものとなるからである。鳥は、まして傷ついた鳥は、一羽でいると悲しそうでしかかもびくびくしている生き物、と人の目には映るのである。

杜甫にも鳥に對するその感覺があつた。その上で、本來同族とともにあるべき存在が單獨であるがゆえに「恨別」し何事かに「驚心」する、と表現した。となれば、單獨であるその主體は何かと読み手が考える時、杜甫とするだけでなく、鳥とみなしやすいのは自明である。何故なら、「鳥」が「恨別」「驚心」することは、読み手が知る鳥の性質により近いからである。

なお、ここで述べた、詩句の主體をどう読む可能性があるかについての考察は、あくまで読み手が詩をどう解釋するかという觀點からのものである。杜甫が詩句に込めた意圖を探るには、杜甫の語感に近づくための別の検討が必要となろう。

最後に

今回の考察を通して、宋人がどのような目で「春望」の三、四句目を見ていたか、多少なりとも明らかにした。杜甫主體で解釋し、それを典故として用いた詩がある。羅大經は花鳥主體の擬人法で解釋しており、その花鳥主體の擬人法そのものも珍しくはない。しかし、「春望」の三、四句目を花鳥主體の擬人法と解釋しなおかつ典故として詠んだ詩は、宋詩の中には見出せない。詩句の斷片に、そう解釋していた可能性が垣間見えるのを指摘できる程度である。宋代では杜甫主體で読むことが大勢であつたと言つてよい。ただし、読み手が「春望」三、四句目の主體をどう取るかによって生じる解釋の差違は、すでに見える始めている。

以上、本論では宋人が「春望」の三、四句目をどのように讀んだかを追ってきた。それ

は、従来の論と同じく、杜甫が自分自身か花鳥かどちらか一方のみを主體として表現している、という前提を意識してのことである。しかし、果たして杜甫は主體をどちらか一方に限定するつもりでそう詠んだのであろうか。最後に、范晞文が杜甫の詩句について「情」「景」の二語で評した資料を見ておこう。『對牀夜語』卷二。

水流心不競、雲在意俱遲、景中之情也。卷簾唯白水、隱几亦青山、情中之景也。感時花濺淚、恨別鳥驚心、情景相觸而莫分也。（中略）固知景無情不發、情無景不生。

「江亭」の「水流れ心競わず、雲在り意は俱に遅し」は「景中の情」、「悶」の「簾を卷けば唯だ白水、几に隠するも亦た青山」は「情中の景」と述べている。確かに、どちらの例にしても、「情」「景」の區別は明らかである。ところが「春望」の三、四句目は「情景相い觸れ分かる莫し」「心情と光景とがくつついて分かれていない」と評する。「感時花濺淚」「恨別鳥驚心」それぞれの句は、どこが杜甫の接した光景でどこが杜甫の心情であるのか線を引けない、と言うのである。そして「景は情無くんば發せず、情は景無くんば生ぜず」と言うところから察するに、范晞文は「情」と「景」とに區別するわけにはいかない不可分の表現を「春望」の三、四句目の中に見出していたのではあるまいか。つまり、杜甫も花も時勢に感じ、花から水滴がこぼれる光景と杜甫が涙を流す心情とを重ね、杜甫も鳥も別れを恨めしく思うがゆえに、鳥が急に飛び立つ様子と杜甫が心を波立たせる姿とを重ねた、という具合に、范晞文は讀んだのではあるまいか。

となると、「春望」の三、四句目をどのように讀むかについての論は、杜甫主體であるか花鳥主體であるかを検討するだけでは足りない。この兩句の主體は杜甫でもあり花鳥でもあると讀めはしないか、という視點についての検討をも重ねていく必要が出てくる。だ

が、今の筆者にはそこまで論じる用意がまだない。他日を期してひとまず論を終える。

附記

十年近く前、岩城先生と雑談する中で「春望」の三、四句目をどのように讀むかの話が出た。當時、京大人文研で石刻資料のデータベース作成に攜わっていた石垣賢一氏が「朝風漸冷、夜月方明、看花落淚、聽鳥心驚」（「唐故趙夫人墓誌銘并序」 上海古籍出版社の《唐代墓誌彙編 上》咸亨〇一三を參看）という墓誌銘の記述を、岩城先生と筆者とに示して下さった際のことである⁽⁶⁾。石垣氏は、愛宕元氏に「唐代の墓誌銘」（『月刊しにか』十二（三） 四八〜五一頁 二〇〇一年三月）という考察がすでにあることも同時に教えて下さった。三人でパソコンの畫面を眺め、この句は書き手が主體だと話しあったことを思い出す。

「春望」の三、四句目について、先生は花鳥主體說で解釋されている。例えば御著書『漢詩美の世界』（人文書院 一九九七）所收の「春の花と詩人」において「こうした世に感じては、花すらも涙をそそぐようにはらはらと散り落ち、人が離れ離れになった世の中では、鳥も不安そうに鳴いている」と述べておられるように。それまで筆者は、格別の理由もなく杜甫主體說で讀んでいたけれども、この時から、「春望」の三、四句目をどのようにとらえるか注意を拂うようになった。

今號は岩城秀夫先生と平野顯照先生の追悼號である。岩城先生へは、あの雑談をきっかけに生まれた本論を捧げたい。

注釋

- (1) 「杜甫「春望」の濺淚について」 野口宗親 『熊本大學教育學部紀要、人文科學』第四三號
一九九四 三六四～三五七頁 引用部分は三六三頁の上段

- (2) 四つの文獻は以下のとおり。

『新唐詩選』 吉川幸次郎 三好達治 岩波新書 一九五二 (當該箇所は二十頁)

『杜甫』 筑摩書房 一九七二 (八十頁)

『杜甫詩注』 第三冊 筑摩書房 一九七九 (一九五～二〇〇頁)

『吉川幸次郎全集』 第十一卷 筑摩書房 一九六九 (五十九頁)

- (3) 各詩の表記は北京大學出版社の『全宋詩』に據った。第何冊の何頁に見えるかを詩題の後に付しておく。

- (4)

强至「送王天常太祝詩」(十・六九五六)

「感時雙淚落、送客片帆西」(時に感じ雙淚落ち、客を送らば片帆西す)

胡銓「和林和靖先生梅韻」(三十四・二一五七四)

「感時湔淚幾時乾、顧影伶俚獨立難」(時に感じ涙を湔ぐに幾れの時か乾かん、影を顧れば伶俚として獨立すること難し)

史堯弼「贈別」(四十三・二六九〇三)

「恨別休驚鳥、相忘已兩鷗」 （別れを恨むも鳥に驚くを休め、兩鷗を已めしを相い忘れん）

王邁「清明郊行」 （五十七・三五七八六）

「感時莫灑花前淚、不道中原漲戰塵」 （時に感ずるも花前の涙を灑ぐ莫く、中原に戰塵の漲るを道わず）

徐元杰「贈日者盧生」 （六十・三七八一九）

「忘憂對草閒供詠、濺淚看花重感時」 （憂を忘れ草に對し閒かに詠を供え、泪を濺ぎ花を看て重ねて時に感ず）

(5)

歐陽脩「啼鳥」 （六・三六四九）

「花間祇慣迎黃屋、鳥語初驚見外人」 （花間 祇だ慣れる 黃屋を迎うるを、鳥語 初めて驚く 外人を見るを）

歐陽脩「答謝判官獨遊幽谷見寄」 （六・三六八六）

「新花自向遊人笑、啼鳥猶爲舊日聲」 （新花 自ら遊人に向かいて笑い、啼鳥 猶お舊日の聲を爲る）

王安石「留題微之廨中清輝閣」 （十・六六五四）

「鷗鳥一雙隨坐嘯、荷花十丈對冥搜」
（鷗鳥一雙 坐嘯に隨い、荷花十丈 冥搜に對す）

王安石「後殿牡丹未開」（十・六七・一七）

「此花似欲留人住、山鳥無端勸我歸」
（此の花 人を留めて住まわしめんとするが似く、山鳥 端無く我に歸るを勸む）

晁補之「曉發樓子莊」（十九・一二七八四）

「林花一迎笑、岩鳥相借問」
（林花 一たび迎えて笑い、岩鳥 相い借問す）

張耒「暮春三首」之一（二十・一三一六一）

「啼鳥日求侶、晚花如向人」
（啼鳥 日び侶を求め、晚花 人に向かうが如し）

張耒「感春十三首」之十一（二十・一三三五二）

「野花迎客來、啼鳥驚我去」
（野花 客の來たるを迎え、啼鳥 我に驚きて去る）

楊萬里「仲良見和再和謝焉」（四十二・二六〇七三）

「山鳥頻招飲、江花鮮笑人」
（山鳥 頻りに飲むを招き、江花 鮮かにして人に笑う）

(6)最近では、謝國劍「如何理解『感時花濺淚，恨別鳥惊心』？」
（《文史知識》三三七

二〇〇九年第七期

中華書局

二〇〇九

一五〇～一五四頁）
が取り上げている。